

「新しいこと」か「昨日と同じ今日」かのはざまに立って

滋賀県・水口中学校 井上 陽平

環境を考えることは人間を考えることである、ということは今更ながらに感じた体験だった。東日本大震災という圧倒的な破壊力、そしてそこからわずかな時間(プランクトンのレベルでは1ヶ月、大型魚も含む全体で2年と聞いた)で海の生態系が元に戻るという驚異的な復元力、ともにすさまじい自然の力に感銘を受けた。さらに森林・湿原・川・海が一体となる壮大な自然のつながりにも感動した。しかし、それ以上に深く考えさせられたのは、大きな堤防を作ることを受け入れなかった舞根湾と受け入れた他の地域とのコントラストであり、舞根湾で新しい生態系の発見を目指して研究する方々と前例がないことを理由にその研究への協力をためらう自治体のコントラストであった。それはつまり「新しいこと(厳密に言えば本来自然が持っている力を『再発見』することだが)」に踏み出す人々と「昨日と同じ今日」にとどまる人々との志向のちがいであるように思う。

「昨日と同じ今日」をしようとすることを「思考停止」「付和雷同」と批判することは可能だ。しかし大切な人や物を失った中で「とりあえず元の生活に戻りたい」という思いが多いこともわかる。豊かな舞根湾の自然と巨大な他町の堤防を見て、この対比をどう考えたらいいいのか、と思いながら私は帰宅した。そして、そのモヤモヤした気持ちをそのまま授業にして生徒に問うことにした。

授業の流れは以下のとおり。顧問をしている部、担任をしている特別支援学級、授業を担当している中2のクラスで実施。

① 東日本大震災の復習・確認

東日本大震災当時生徒は4歳～6歳であり、記憶がない生徒も多い。そこでどのような地震であったのかをNHK「3.11 あの日を忘れない」からの映像(12分)で確認する。

② 舞根湾の研究参加報告

自身が参加した実習の様子を報告。舞根湾の3.11前と後の変化を写真で比べ、震災直後から自然は復元をはじめ、現在ではほぼ復元したこと、そして森林・湿地・川・海がつながって大きな生態系を形成している可能性があることなどを写真とともに伝える。

本県の生徒が小5の琵琶湖調査で体験している透明板の写真で調査の様子を示した。また多くの魚を見せることで生物への興味が高まるように工夫した。

③ これからの東北について考える

巨大な堤防の写真と舞根湾の湿地の写真を並べ、私が感じた「新しいことをはじめると」「震災前の状態に戻す」ことについて、自分はどう思うのかを考えさせて意見を交流する。

※生徒の意見から(③の問いに対して)。「新しいことをはじめると」「震災前の状態に戻る」の比は大体3:1。

- ・ もとに戻した方がいい。自然を大切にするのもいいけれど、思い出がつまったところに住み続けたと思う。
- ・ 自分もそうだけど、新しいほうがワクワクして、生きる希望みたいなものがある。
- ・ 森を作るのもわかるけど、また津波が来たらまたゼロからやり直すことになる。堤防を作ってまた傷つく人を減らしたい。
- ・ 新しいことをすれば過去に起きたことを忘れられる。新しい生活が自然の中でできるのならその方がいい。

授業を終えて、①の映像のインパクトと③の問いを考える活動のふたつが②の調査体験報告を上回ってしまったという反省がある。今後②に関しても有効な「問い」を作ることが課題である。しかし同席していた教員は②が一番興味深かったと話した。高校生や大人に対してはこの授業は有効かもしれない。

自分はこれからの環境保護は交渉と広報の力が鍵を握っていると考えている。その点で横山先生の活動に大いに感銘を受けた。自治体や地域にある「昨日と同じ今日」志向に対し、粘り強く、さまざまなアイデアで「新しいこと」を実現しようとする先生の姿勢こそが、環境への取り組みにもっとも必要なものだと感じた。そしてそこに自分のような「文系・インドア派」が参加できる余地があると考えている。この「文系・インドア派が参加できる」環境教育を、自身の体験を加えながら引き続き模索していきたい。

